

# 新しい時代を担う人材を育てよう

## 岡田 呉陽

藩校広徳館の先生

藩主に学問を教えた

私塾で優秀な人材を育成



1825 (文政8) 年7月18日—1885 (明治18) 年6月29日

### 有名な寺子屋の二男

「小西屋臨池居」という寺子屋を開いた小西有斐の二男です。本名は信之といひます。この寺子屋は呉陽の祖父が始めたもので、北陸でも最大の寺子屋でした。19歳

のときから、幕府が江戸に開設した昌平坂学問所(昌平校)で3年間学びました。優秀な仲間たちの中で呉陽は勉強に意欲を燃やし、特に漢詩文が得意でした。



江戸時代の昌平坂学問所の絵図(部分)(斯文会提供)

### 有能な人材を育てたい

富山に戻った呉陽は、富山藩の藩校「広徳館」の学頭(校長)をしていた岡田栗園の養子に迎えられ、「岡田呉陽」と名乗ります。

栗園は富山藩10代藩主の前田利保に協力して本草学(薬草など薬になる天然の産物を研究する学問)の本を著した学者です。

栗園の引退後、岡田家を継いだ呉陽は藩の馬廻役(藩主に付き添い、事務の取り次ぎなどを行う役)

と広徳館の学正(先生の階級の一つ)に任命されました。その後、藩の横目職(藩士の行動の監察や論功行賞を行う役)を経て、藩では近習頭(藩主の秘書役)に、藩校では藩主に学問を教える文学(先生の階級の一つ)になりました。



広徳館孔子像(富山県立図書館蔵)

### 新しい時代の学校を設立

呉陽が藩校に勤めた幕末は、開国をめぐって日本の政治が激動していました。

呉陽は藩校で藩士の動揺を抑えるのに努力しました。また、新しい時代に活躍できる人材育成に向けて、藩校の先生たちが家で塾や道場を開くことができるよう制度を改め、庶民の子どもにも教育を受ける機会をつくりました。

1871 (明治4) 年、明治政府

は藩を廃止し、府と県を置く廃藩置県を行いました。これによって広徳館をはじめ各藩の藩校も廃止となり、翌年には学制が公布され、全国に小学校が設置されていきました。

呉陽は小学校教育だけでは十分



富山城址二階櫓門は明治時代、俣野小学校(現富山市立芝園小学校)の校舎となりました。(富山市郷土博物館所蔵)

な教育は受けられないと考え、漢学・数学・英語も教える「変則中学校\*」の設立に力を尽くしました。

\*変則中学校【へんそくちゅうがっこう】1872 (明治5) 年公布の学制では正規の中学校のほかに、それに相当する学校として変則中学、家塾、中学私塾が定められていました。



### 私塾で優れた人を育てる

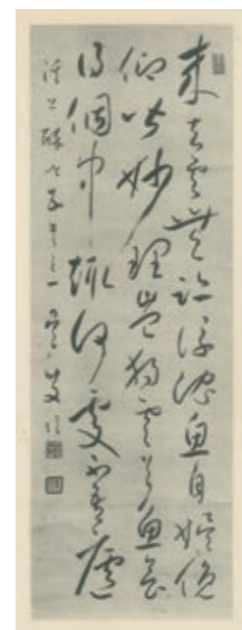
呉陽は広徳館が廃止になる以前から、養父の岡田栗園が開いた塾「学聚舎」でも教えていました。藩と藩校の仕事を辞めてからは「学聚舎」を清水村(現富山市)に移して塾の教育だけに絞り、自分の考えに基づいた教育を行いました。

小学校だけでは修業年限が短く、内容も施設も十分ではなかったため、小学校を終えても、もっと勉強したいと思う子どもたちが呉陽の塾に入って来ました。明治維新の後には藩の廃止とともに私塾もなくなっていきましたが、呉陽の「学聚舎」と、小西兄弟が経営する「小西屋臨池居」だけは存続し、多くの人材が育っていきました。

「小西屋臨池居」は、漢学に加え富山売薬の行商人に必要な知識も教えていました。これに対して、「学聚舎」は漢学・儒学を学ぶ学校でした。富山県での分断・独立運動を進めた米沢紋三郎(→38ページ)らが、「学聚舎」で学んでいます。



「呉陽遺稿」(富山県立図書館蔵)



呉陽の書(富山県立図書館蔵、「呉陽遺稿」より)



呉陽の頭影碑(富山市於保多町)

### 夢や志をかなえたポイント

- ・優秀な人の中で自分を高める
- ・その時どきに必要な知識を学ぶ
- ・自分の知っていることは他の人に教える

豆知識 藩校の先生には、いくつかの階級がありました。上から祭酒(学頭)、文学(次席)、教授、学正、訓導と分かれています。呉陽は文学まで務めました。

1825 (文政8)	0歳
新川郡富山町に生まれる	
1844 (弘化元)	19歳
江戸の昌平坂学問所で3年間学ぶ	
不明 (不明)	不明
岡田栗園の養子になる	
1855 (安政2)	30歳
富山藩馬廻役と広徳館の学正になる	
1857 (安政4)	32歳
富山藩横目役になる	
1865 (慶応元)	40歳
広徳館の規則を改める	
1871 (明治4)	46歳
広徳館の一等教師になる	
1877 (明治10)	52歳
富山師範学校の教師になる	
1878 (明治11)	53歳
教師を辞め学聚舎で子弟の教育に専念する	
1885 (明治18)	59歳
亡くなる	

### コラム 飛越地震で被災地を飛び回った呉陽

呉陽は有名な学者ですが、机に向かっていただけではありません。藩の役人をしていた1858 (安政5) 年に起きた飛越地震で常願寺川があふれた際、呉陽は数十日間にわたって村々を回りました。寝食を忘れて復旧工事を監督し、また家を流された人々を救うため力を尽くしました。



常願寺川の大洪水の絵図(「安政五年越中大地震 地水見聞録」[部分] 富山県立図書館蔵)